

高橋是清の日露戦争

—明治官僚の剛胆と運

拓殖大学 学長
渡辺 利夫

金融に携わる人であれば高橋是清が何を
やった人物であるかはつまびらかではないま
でも、少なくとも名前は聞いたことがある。

同時代の指導者の多くがそうであるよう
に、高橋の人生もまた波瀾万丈であった。庶
子として生まれ、仙台藩足輕に引き取られ、
仙台藩留守役に才能を見出されて横浜に派さ
れて英語を習得、14歳で藩費留学生となって
渡米、明治2年、16歳で開成学校の英語教官
となった。その間、遊蕩にふけり芸妓屋の手
伝いなどをしながらも、明治14年に商務省に
入省、明治22年にはペルーの鉱山開発事業に
出資代表者として赴いたものの、事業に失敗。

しかしその並はずれたスケールの大きい行
動力が明治25年、時の日銀総裁川田小一郎に
見込まれ、明治28年には横浜正金銀行に入行、
同行の取締役から副頭取になり、明治32年2
月からは日本銀行副頭取、明治39年からは横
浜正金銀行の副頭取を兼任、明治44年には日
本銀行総裁となった。

その後、大正2年には山本内閣の、大正7
年には原内閣の大蔵大臣、大正9年の原首相
暗殺後には首相兼大蔵大臣、政友会総裁、農
商務大臣を歴任。大正2年の金融恐慌により

若槻内閣が倒れ、田中内閣が成立するや大蔵
大臣に就任、恐慌の沈静化に成功した。大正
5年、金解禁により恐慌からの回復を図った
ものの、不況の深刻化は著しかった。高橋は
新たに成立した犬養内閣の大蔵大臣として金
輸出再禁止を断行、その上で為替レート切り
下げによる輸出振興や日銀の公債引受など
により景気の回復に努め、列強に先駆けて恐慌
脱出に成功した。

高橋は昭和11年の2・26事件で銃殺され、
大きくうねった人生の幕を閉じた。一貫して
日本の財政・金融に強い影響力を行使つづ
けた人物であった。この高橋を悩みに悩ませ、
しかしこれに成功して、高橋の地位を不動の
ものとした日露戦争時のエピソードを以下に
記しておこう。

日露戦争を外務大臣として指導したのは小
村寿太郎である。小村を苦心惨憺させたもの
の1つが戦費の調達であった。日本の戦費は
決定的な不足状態にあった。日清戦争におい
ても戦費不足ははなはだしくその52%を公債
に依存したが、日露戦争におけるその比率は
実に78%であった。これをすべて日本国内で
調達することは到底不可能であり、外債の起

債が急務であった。

小村は駐英公使林董に電信し、英国の外務大臣ランスタウンに支援を乞うたが、目下の英国はボーア戦争を戦っている最中であり、これが龐大な財政資金を要し、日本の要求には残念ながら応じられない旨の回答であった。しかしここで諦めては継戦は不可能である。閣議決定により日本銀行副総裁の高橋是清を英米に遣わし、外債起債を要請させることになった。

当時の軍事予算の不足がいかに厳しいものであったかは、政府が高橋に指示した計画書によって明らかである。日清戦争の軍費の約3分の1が外債に依存した。日露戦争においては4億5000万円の軍費が必要であるが、もしその3分の1を外債に依存するとすれば1億5000万円がこれに相当する。日本銀行所有の外貨が5200万円であるから、残りのほぼ1億円が不足ということになる。戦時起債となれば応分の担保が必要となるが、これには関税収入を充てるという計画であった。

そして閣議は高橋にこう指示したのである。

「就テハ此ノ心得ヲ以テ速ニ出発シ、年内ニ一回ニテ成功セサレハ二回ニテモ差支無キヲ以テ一億円ノミハ是非募債スル様努力セラレ渡シ。更ニコノ戦費ハ一年ト見積リタルモノ、即チ朝鮮ヨリ露軍ヲ一掃スルノミノモノニテ、若シ戦争、鴨緑江ノ外ニ続クニ至ラハ更ニ戦費ハ追加セサル可カラス」

当時のレートでいえば、1億円は1000万ポンドほどである。高橋是清は明治36年2月24日にニューヨークに向け出立、何人かの銀行家に面会し事情を説明したものの、当時の米国はむしろ自国の産業発展に外貨を必要としており、日本のために外債を募集する余裕はないというのがその回答であった。高橋は直ちにロンドンに向かい、正金銀行の取引先であるパース銀行、香港上海銀行、チャーター銀行等と交渉したものの、日露戦争において日本が勝利することなど信じられておらず、答えは芳しいものではなかった。しかし食ひ下がる高橋は条件闘争に入り、譲歩を重ねて何とか5000万ポンドの起債を、パース銀行、香港上海銀行、横浜正金銀行の3行より成るシンジケート銀行団に認めさせた。

高橋は利回りは4%として交渉したが、結果は6%となり、期限5カ年という厳しい条件が付けられた。しかしこの条件を飲むより他に道はなかった。担保が関税収入であれば関税管理のために英国の専門家を日本に派遣するといった条件まで出されたが、高橋是清は憤然、日本はこれまでに得た外債の元本・利子を1厘たりとも怠ったことはない。清国と同列にみられてははなはだ迷惑であるとしてこれを拒否した。日本は日英同盟下の英国からしてもこの程度の小国、つまりは世界の金融市場における信用度の低い小国としてしか認識されていなかった。

ところで得られたのは5000万ポンドで、残

りの5000万ポンドはいかんともし難い。まことに幸いなことに、たまたま在英中の米国のクーン・ローブ商会の上席パートナーであるJ.H.シフが5000万ポンドを引き受けてもいいと申し出てくれた。鈴木俊夫によれば「米国ユダヤ人協会会長としてのシフは、特別の関心を日露戦争の帰趨に寄せていた。高橋のシフ伝記に対する寄稿文は、この時のシフの深層心理について“もしロシアが敗北すれば、革命にしろ改革にしろ、よい方向に進むであろうとシフが考えていたことは確かであった。彼は米国の資産を日本軍に加担させるために、もちうるあらゆる影響力を行使しようと決意した”と描写している。日露戦争への徴兵をふくめたロシアにおけるユダヤ人迫害が、日本政府の外債発行を米国で引き受けようとするシフの最終的な決断に大きな影響を

与えたことは事実であった」という（「外債発行の現場から—ロンドンの高橋是清」鳥海靖編『近代日本の転機 明治・大正編』吉川弘文館、2007年）。

ロンドンとニューヨークで起債が始まったのは明治37年5月12日であった。実際には外債の引受額は5000万ポンドの数倍に及んだ。同年5月1日の日本軍による鴨緑江渡河作戦の成功が英米の新聞で大きく取り上げられ、日本の勝利の可能性がにわかに人々の口の端に上ったからであった。まことに軍事力は、外交はもとより金融的信用の基礎でもあることを如実に示した。明治期官僚の剛胆と、これがおびき寄せた運の強さを示して、高橋のロンドンにおける成功は興味尽きない挿話であろう。